



土岐市教育研究所
TEL 0572-54-1111 (内373)
FAX 0572-55-6310
メールアドレス kyoiku@city.toki.lg.jp
No. 571
発行責任者 所長 河合 広映
発行日 令和5年 9月 19日
題 山田 恭正 教育長



撮影 泉小学校

教頭 中村 勝

「ここ、素敵だね。」
『ここが一番大変だった。』
『夏休みの作品の頑張りを認め合う』

正解は？

土岐市教育研究所長 河合 広映

$$6 \div 2 (1 + 2)$$

何気なくテレビを見ていた時、数学者を悩ませた問題として出題されていました。正解はいくつでしょうか？私は迷わず「1」と答えていました。ところが、解答は「9」になる考え方もあるということです。むしろ、こう答える方が一般的な考え方だそうです。乗法・除法は左から右へ計算していくという法則を正確に覚えていれば答えは「9」になります。でも、なぜか何となくの記憶の下、 $2(1+2)$ は一つの項だから、優先的に計算しなければという思い込みからか、それで計算をすると「1」になります。ネット上でもこの問題が取り上げられ、そして、議論され、アメリカの「PEMDAS (Parentheses、Exponents、Multiplication、Division、Addition、Subtraction)」やイギリスの「BODMAS (Brackets、Order、Division、Multiplication、Addition、Subtraction)」などの考え方(何を優先的に計算するか)の違いが紹介されていて、興味をもったことを思い出しました。実は、日本語にもあるのです。次の文を読んで「泣いているのは母か、わが子かどちら？」と問われたらどう答えるでしょうか？

「母は泣きながら走ってきたわが子を抱きしめた。」

さあ、泣いているのはどちらでしょうか。母とも考えられますし、わが子だということもできます。しかし、先に紹介した計算問題も、あとから紹介した文も、「この問題自体がおかしい」ということもできます。そもそも $6 \div 2(1+2)$ の問題は、何から計算するかを示すべきだという考え方です。例えば、 $(6 \div 2)(1+2)$ ならば、誰もが「9」と答えるでしょう。また、 $6 \div (2(1+2))$ ならば、「1」と。母の文にしても、どこに読点をうつか

で「泣いた人」が変わるという考え方です。「母は、泣きながら走ってきたわが子を抱きしめた」ならば、泣いているのは「わが子」と多くの人が答え、「母は泣きながら、走ってきた…」ならば泣いているのは「母」と答えるでしょう。

何かが足りないことが要因だったり、さらに思い込みや早合点だったりして、正解は「こちらだ」と決めてしまうことはよくあります。他の人の意見を聞いて、「えっ！？そんな考え方もあるの？」と新たな発見をすることもあります。

「鳥の目 虫の目 魚の目」という言葉があります。鳥のように物事を俯瞰してみる見方、虫のように細かなところまで集中してみる見方、魚のように流れを読んで先を見通す見方、のことをいうようです。何かを決断しなければならない時、正解を導き出すことは難しいものです。「これが正解だ」と思ったとき、ほかの考え方はないのだろうかと思い直すことが大切だと思うのです。しかし、案外、何かを決断しなければいけない時ほど、切羽詰まっていた余裕がない時の方が多いものです。でも、それでも、もっと他の見方はないかと考え、他の人の知恵も借りながらいくつかの選択肢が広がると、「どれが正解か、不正解か」という考え方だけではなく、「最適解は何か？」という考え方も生まれてくるのだと思います。物事を決める時にはどれが正解かという考え方以外にも、どうやったら最適解になるかという考え方、行き詰った時の光明になるかもしれません。



子供の声が響く学校に



肥田小学校長
中村 光代

はじめに

学校に行動制限のない当たり前の日常が戻ってきました。しかし、小中学生である子供たちにとっては人生の1/3程度が「マスク生活」であり、人と触れ合うことに制限がある生活経験をしたこととなります。この期間は私たち教職員にとっても大きな影響を及ぼしました。新学習指導要領で掲げられた『主体的・対話的で深い学び』よりも感染症から子供を守ることを優先し、子供に一律に同じ方向を向けさせ、コミュニケーションをとることを控える指導をせざるを得ませんでした。子供たちに未来の社会を形成する人として必要な力をつけるために、今、私が大切にしていることを述べたいと思います。

『やる気 本気 根気』が合言葉

本校の今年度の合言葉です。この3年間、やりたくてもできないこと、あきらめなければいけないことがいくつもありました。そのため、子供たちにも先生方にも、今年度はやりたいと思ったことに思いっきり取り組んでほしいと願いました。学校は失敗してもよい安心して学ぶことができる場所です。もっとよい自分になるために「がんばりたい」「できるようになりたい」気持ちがもてる学校であること、全力で取り組む姿をカッコいいと思える仲間づくりを通して、「もう1回やってみる力」を育てることを大切にしています。そのため、今年度より代表委員会を復活させました。子供たちが願うスローガン『全校が助け合い、笑顔あふれる学校にしよう』が生まれ、全校の思いを集めた運動会スローガンが掲げられようとしています。子供たちの願いが語られ、それを実現する学校を目指しています。



対話的な活動のある授業づくり

本校は11月に肥田中学校校区「課題解決指定」の発表を控えています。研究テーマ『どの子もわかる、できる、深まる授業づくり』を対話的な活動を通して実現しようと実践を重ねてきました。対話的な活動の中心は授業の途中で行う少人数交流であり、少人数交流を行う目的を明確にすることを研究の中核としてきました。目的が明確になるとその効果にも焦点が当たり始め、少人数交流の

位置づけが多様になり、対話の方法にも広がりが見られ始めました。少しずつですが、先生に指示されるまで待つて学ぶ姿から、先生の指示がなくても仲間との対話を通して自分の学びを深める姿が増えてきています。子供が主役となって学ぶ授業を目指し奮闘しています。

SOSを受け止められる学校づくり

いじめ・不登校・自殺などの未然防止、そしていのちの教育の重要性は増すばかりです。肥田小では学校内で子供がSOSを出せる場所（人）を増やそうと、昨年度から5・6年生を対象にした「ハートフルタイム」を設けました。5・6年の全ての子供が教育相談員と個別で話す場を設けることで、教育相談員と面識をもち、話を聴いてくれる人がここにもいることを認識することを目的としました。それに加え、今年度はSCと教育相談員が全ての教室を回り、話をする場や聴き手がいることを学年に合わせて説明しました。「話を聴いてほしい」と時折利用する児童ができました。顔が見えない相談窓口も必要ですが、子供たちの近くで話を聴いてくれる人がいる環境づくりを大切にしています。「心のアンケート」実施後は担任との二者懇談を設けていますし、私は毎朝児童玄関に立ち、子供たちのなんでもない話を聴くことを大切にしています。

子供に「SOSを出していいよ」と働きかけるということは、子供のSOSを受け止める私たち教職員側にありのままの子供を受け止める器が必要となります。しかし、みんな（多数）と同じであることをよしと考えたり、大人が描くよりよい生き方を論そうとしたりしていることが往々にして起きていることはないでしょうか。「教え導くこと」と「ありのままの子（個）を受け止める」この両面を教員の資質として磨いていきたいと考えています。

おわりに

社会に学校によりやくコミュニケーションが戻ってきました。感情・思考などを共有することで仲間意識が生まれ育ちます。子供たちについて語り合う学校、子供たちの声が響く学校づくりを大切にしたいです。

『人と関わる力を育む』

西部こども園 園長 前田 宏香

1 人との関わり

園生活で子ども達は友達、保育教諭、保護者や地域の方と関わりながら、いろいろなことを吸収したり学んだりして成長している。子ども同士の間関係は、自ら友達と一緒にいたい、関わりたい、遊びたいという思いから一緒に活動する楽しさを感じたり、思いがぶつかり葛藤したりするなどの経験を積み上げ深まっていく。保育教諭は、子ども主体の遊びや生活の環境構成をしたり、言葉での伝え合いを援助したりして多様な関りを持ちながら、遊びや生活が充実するよう日々取り組んでいる。

2 当番活動での育ち

年齢や一人一人の発達の違いにより言葉の獲得や表現に違いがあるが、将来に向けた子ども達のコミュニケーション能力の向上や社会性の育ちを願い当番活動をしている。当番はみんなの前で話をしたり、欠席報告をしたり、その日の約束をクラスのみんなに伝えるなど、伝える相手がいて言葉のやり取りをする特別な活動である。

【当番活動を通して育つ力】

- ① 助け合い:お互いに助け合い協力して目標を達成する。
- ② 責任感:自分がクラスの中の一人だという自覚を持ち、責任を持って仕事をする。
- ③ 協調性:当番が互いに協力する。
- ④ 自己管理能力:当番の仕事をきちんとこなすことで、自己管理を意識できるよう

になる。

- ⑤ 自己肯定感:当番の仕事をやり遂げることで自分自身を肯定し、自己肯定感を高める。
- ⑥ 言葉のやり取り:相手の話を聞く、自分の思いや考えを相手に伝える。

保育教諭は、子ども同士の間関係が生まれる遊びの環境を構成し、遊びや関わりを支える援助をしている。

3 異年齢活動での育ち

年度初めから異年齢活動を行い、3歳児から5歳児と一緒に活動する時間を意図的に作っている。異年齢での姿には5歳児が3歳児の身の回りのことを手伝い、3、4歳児は5歳児が遊んでいる姿を見て同じことがしてみたいと興味をもち、子ども同士と一緒に遊びながら教えてもらっている姿がある。また、お互いの興味関心や経験の違いから新しいアイデアや発想が生まれることもある。異年齢の子ども達が一緒に過ごす環境の中で、同年齢の子ども達だけでは味わえない柔軟性や社交性が育ち、協調性、優しさ、思いやりといった人間関係を築くための力が育つと考える。今後も子ども主体の活動を通して人と関わる力を育んでいけるよう環境を整え、子ども達の豊かな人間性を育成していきたい。



子どもの困り感に寄り添った支援体制づくりへ

教育総務課 保母 征之

以前勤務していた学校の校内研修で、特別支援学級に在籍する子ども1人に着目し、1時間の授業における行動をつぶさに記録し、どうしてそのような行動をしたのか考察し記録することを行いました。「元気よく挨拶する」「きょろきょろ周りを見る」「隣の子に〇〇と話す」「あくびをする」「机にふせる」「あーと大きい声を出す」「プリントに丁寧に書く」など記録し、どうしてその子がそのような行動をしたのか考察しました。その後の研修会で、行動の理由について話し合いました。「たくさんの人がいたから」「見通しがもてなかったから」「指示の〇〇という部分が具体的で理解できたから」などたくさんの意見が出る中で交流が深まりました。これまで子どもが「できなかった」ことや「やらない」ことについて、安易に子どものせいにしていた自分の指導や支援の在り方を見直すよい機会となりました。

例えば、教室の中で、机の中の整頓ができない子どもがいます。一般的には「だらしない」「自己管理ができない」と指導を受けがちな子どもたちです。でも一方の目（支援）で見ると、不器用さ（運動機能）でうまく片付けることができない。片付ける手順（実行機能）が分からない。注意が散漫（注意機能）で片づけることができない。空間がうまくとらえられない（空間認知）などの原因が考えられます。一方の目で見えた時、はじめてその子の困り感に寄り添った支援（案）があります。教科ごとにファイリングをする。机の中の全体重量を減らす。置き場所を決めて視覚的に示す。配付物は連絡袋に入れる。支援によって改善されれば、その子の特性もよく分かります。実際に、各学校へ訪問した時に、教室でこのような支援がなされているのをよく見かけます。

体育の授業や運動会、体育祭などでダンスなどの取組があります。振り付けをなかなか覚えることができなかったり、そろわなかったりする子どもがいます。ダンスの振り付けは抽象的なものが

多く、言語化することが難しいため、動きの理解が苦手な子（高次脳機能・運動企画）には困難な課題になりやすいです。また、手をつないだりすることについて苦手（触覚過敏・感覚過敏）な子もいます。お手本の向きをそろえたり、お手本の左右の手足に違う色（右は赤で左は青など）の手袋やソックスをしたりする。ポイントを一箇所にしばりこむ。椅子に座り、上半身だけ覚えていく。手袋などをする。振り付けを変更する。

つまり、児童生徒の困り感に寄り添った支援を構築していくためには、適切な「アセスメント」が必要です。「アセスメント」とは、支援の対象になる子どもの情報の収集・分析を行い、その状況に応じた支援を見立て、実施し改善していくことです。さらに、適切な「アセスメント」を進めていくためには、連携することが大切になってきます。関係する学校職員はもちろんですが、SCや市SSW、病院や療育センター、支援学校地域支援センター、放課後デイサービス等とも情報や見立てを共有し、支援していくことで、よりアセスメントの実効性や改善が効果的なものとなっていきます。

違う話となり恐縮ですが、国際的に活躍するピアニストが、自身の子どもの頃の演奏を聞いて、「技術的にはもちろん下手ですけど、あの音を出すことは今の私にはできません」と話してみえました。ピアニストになるという夢を抱きながらも、「今」その時を大切にしてきた方の言葉だと感じました。教育の出口は未来にあります。そのためにも、子どもたちの「今」を大切に、「今」しか出せない音色を精一杯出せるように、その環境を、私たちがチームとなって築いていく必要があります。



令和5年度土岐市嘱託研修員会

「やってみたい」を引き出し、「できた」「わかった」と実感できる授業の実現

実践報告 土岐市立肥田学校 橋本 梨々子

【日 時】 令和5年 5月 23日 (火) 第5校時

【学 級】 肥田小学校 4 年 B 組

【單元名】 式と計算

【本時のねらい】

加減が混じった２段階構造の問題を式に表す活動を通して、 $()$ が一つのまとまりであることに気づき、１つの式に表す方法や計算の順序を理解することができる。

「視点1」 導入「やってみたい」



2つの場面
で、買い物
の仕方がち
がうね。何
がちがう？

本時の授業のキーワードとなる言葉を引き出し、全体で共有することで、土台をそろえる。

「視点3」 終末「できた」「わかった」



やっぱり、○が必要なんだな。

できたぞ！
そういうことか。

協働的な学びの後に「類題」を取り入れることで、児童がさらに理解を深め、実感を伴ったまとめを行えるようにする。

[視点2] 展開

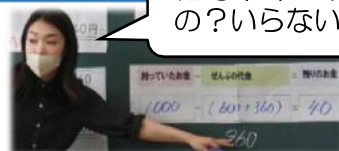
個別最適な学び

ヒントカードを使うか児童に
選択させ、自ら学ぶ姿勢を大切
にする。



協働的な学び

()がないと、問題と式がちがってしまうよ。



結局()は、いる
の？いないの？

児童の思考をゆさぶり、仲間との話し合いを通して、考えを形成させる。

実践を終えて

- ・協働的な学びの目的をよく吟味し、最適なタイミングと問いかけの言葉を工夫したことで、「() が1つのまとまりを表している」ことに児童たち自身が気づき、1つの店で複数の商品を購入する問題場面を1つの式に表すときには、()が必要であるという結論を出すことができた。
- ・まとめの前に「類題」を取り入れたことで、本当にそうなのか確かめたり、理解したことを実践したりすることができ、学習のまとめにより納得感をもつことができた。

展開詳細

	学習内容および学習活動	指導・援助
つかむ	1 問題を把握する。(8分) 問題 1000 円を持って買い物に行き, 600 円の本と 360 円のおかしを買いしました。いくら残りますか。 ○2つの場面の相違点を考える。 ・2人とも1000円持っていき、買ったものの値段も一緒だね。 ・はるとさんは本とお菓子を2つの店で別々で、みづきさんは本とお菓子を同じ店で一緒に買っているね。 ○さくらとつばさの式を提示し、どちらの場面を表した式か考える。 さくら (はると) $1000 - 600 = 400$ $400 - 360 = 40$ 答え 40 円 つばさ (みづき) $600 + 360 = 960$ $1000 - 960 = 40$ 答え 40 円 課題 2つの式を1つの式に表す方法を考えよう。	- 問題文の「分かったこと」、「求めること」を確かめ、どんな式になりそうか考えさせようえで、はるととみづきの場面を提示する。 【導入ーやってみよう】 はるとの場面では、「順番に」買っていること、みづきの場面では、「まとめて」買っていることをおさえることで、計算の仕方が違うか追究したいという意欲をもたせる。 - それぞれの式で表されている数が何を表しているか確認することで、個人追究時の言葉の式に自然とつながられるようにする。 3つの数の計算を1つの式に表したことを想起させ、1つの式に表せないか問いかける。 - キーワードを提示し、キーワードを使って自分の考えをまとめたり、説明したりするように伝える。
深める	2 個人追究 (5分) ○自分の考えをノートに書く。 ・さくらの考え 持っていたお金 本の代金 お菓子の代金 残りのお金 $1000 - 600 - 360 = 40$ 答え 40 円 ・つばさの考え 持っていたお金 本とおかし全部の代金 残りのお金 $1000 - (600 + 360) = 40$ 答え 40 円 3 全体交流 (10分) ○考えや交流の様子を発表する。 ・さくらの考え「式は、$1000 - 600 - 360 = 40$ 円です。最初に持っていたお金が1000円で、そこから本の代金を支払ったので1000円から600円引きます。その後、別の店でお菓子の代金を支払ったのでさらに360円引きしました。」 ・つばさの考え「式は、$1000 - (600 + 360)$ です。最初に持っていたお金は1000円です。そこから、本とお菓子の代金をまとめて支払ったので、600円と360円を1つにまとめるために足して()を付けました。そして、まとめたお金を1000円から引きしました。」 → 出た意見をもとに、()をつけた理由を交流する。 4 少人数交流 【確かにする】 (8分) ○$1000 - 600 + 360$ ではなぜいけないか考える。 ・1000円から600円の本を買った後、360円もらった計算になってしまうから。 ・まとまりという意味の()がないと、みづきさんの場面と合わないから。 ・計算の順番が変わって、答えが760円になってしまうから。 → ()がひとまとまりという意味であることをもとに、計算の順序を問う。 5 類題で確認する。(3分) ○ $100 - (20 + 50) = 100 - 70 = 30$	【個別最適な学び】 2つの考えを検討させる。考えが思いつかない児童には、①ことばの式を参考に、②黒板に掲示した図を参考にする、③ヒントカードを参考にするように声をかける。 - 全体交流では、教師が言葉の式と対応させながら、式の意味をおさえる。 - 袋の中に入った本とお菓子の掲示物を見せ、()の中はひとまとまりであることを、確認する。 - 全体交流では、計算の順序や答えより、式について着目させ、()を使った理由を考えさせる。 $1000 - 600 + 360$ の誤答について、なぜ間違っているのか考えさせる。「()がないから」と答えた児童には、なぜ()がないといけないのか問い返す。分からない児童には、問題に立ち返って考えるように声をかける。 【協働的な学び】 目的「情報を精査して考えを形成する」 方途 ()がひとまとまりの意味を示すことをさらに実感させるために、$1000 - 600 + 360$ がなぜ誤答になる【()を使わないとなぜ誤答になるのか】のか、3人交流で話し合わせる。 - 少人数交流後、「()はひとまとまりの意味を表しているから、先に計算しなくてはならない」ことを全体で再度おさえる。 - 類題として()を使った式を提示し、計算の順序を考えさせながら解かせる。ほかの問題でも通用することを確認した後、まとめへつなげる。 - 等号を縦にそろえて書く良さを児童に問い、式が見やすくなることを確認する。
まとめる	6 まとめる (3分) ○1つの式にまとめるときは、何度も引き算をしたり、()を使ってひとまとまりにしたりするといいいね。 ()を使うと1つの式に表せる。()のある式では、()の中をひとまとまりとみて先に計算する。 7 評価問題を解いて、振り返りをする。(8分) ○鉛筆問題1, 2を解き、振り返りカードを書く。	引き算しても1つの式にまとめられることは認めつつ、「()を使って1つの式にする」ことに着目させてまとめる。 【終末ーできた・わかった】 評価問題を解くことで、定着を確認する。また、今日の学びを振り返って自己評価し、分かったことや変わったことなどを記述する。

夏休み中の活動の紹介

◆ 土岐市中学校体育大会 団体結果 ◆

種目		優勝	準優勝	第3位
陸上	男子総合	土岐津中学校	泉中学校	駄知中学校
	女子総合	泉中学校	西陵中学校	土岐津中学校
	男女総合	泉中学校	西陵中学校	土岐津中学校
バレーボール	男子	ビクトリー	濃南中学校	泉中学校
	女子	西陵中学校	土岐津中学校	泉中学校
バスケットボール	男子	西陵中学校	駄知中学校	泉中学校
	女子	泉中学校	西陵中・駄知中	
ソフトテニス	男子	泉中学校	肥田中学校	駄知中学校
	女子	土岐津中学校	西陵中学校	肥田中学校
卓球	男子	西陵中学校	泉中学校	土岐津中学校
	女子	土岐津中学校	濃南中学校	西陵中学校
剣道	男子	西陵中学校	土岐津中学校	泉中学校
	女子	西陵中学校	土岐津中学校	
サッカー		土岐連合	泉中学校	

【サマーセミナー、ありがとうございました】

講師の方や会場校の先生方のご理解とご協力の中、無事に終了することができました。ありがとうございました。

希望制ながら90名の方が参加され、先生方の研修意欲の高さを感じました。受講アンケートからも、講座内容に100%近くの方々から満足、概ね満足と回答いただき、参加者のニーズに応えることができたものと考えます。校長先生からの要望で行いました危機管理講座においては、岐阜市立草潤中学校の鷺見校長から不登校児童生徒の対応についてお聞きして、「今までの教育観を見直す機会となりました。」など、今後の学校教育に役立てる内容の感想が多くありました。

サマーセミナーの成果が園・学校現場で生かされることを願っています。





「町の力」

妻木小学校 教頭 高木真琴

学校は、地域みなさんに支えられていると実感した出来事の時の言葉です。

ある夏、適度に雨が降り気温が平年並みにあり、植物がとても育ちやすい年がありました。9月に運動会が計画されているのに、運動場は草が生えてトラックが見えない状況になっていました。職員室では、子どもが安全に走るためには、運動場の草取りをする必要があるという言葉が出ました。しかし、夏休みの職員作業だけでは、取りきることができませんでした。「少しずつ草を取っていきます。」と夏休みの出勤をした朝に運動場に出る先生もいました。夏休み明けには、子どもたちも休み時間に運動場に出て、自主的に草を取る姿も見られました。しかし、コロナ禍で暑い日が続く、思うように進みませんでした。

最後の頼みは、PTAの方や学校に協力してくださる地域団体の方々でした。運動会前に草取り

の運動場整備が計画されていました。平日の夕方、草取りの道具を持った地域の方が続々と集まってきました。仕事帰りの保護者の方や保護者と一緒に子どもたちも参加しました。120人ほどの方が集まり、運動場の草取りに黙々と取り組みました。1時間弱で軽トラックの荷台がいっぱいになり、トラックのラインをはっきりしました。やっと1周走れるようになりました。あんなに苦労していたことが、地域の力であつという間に解決していききました。地域の方が「これがこの町の力だね。」とつぶやかれました。その声に大きく頷きました。

子どもたちは成長し、「町の力」となっていくます。微力ながらその一助となっていきたいと強く思っています。



掲 示 板

【土岐市児童生徒科学作品展 金賞受賞者】

つちもと のどか (土岐津小1年)	ほりお みちひろ (泉小1年)	ほりお のぶひろ (泉小1年)
宮地 亮輔 (土岐津小2年)	加藤 功太郎 (下石小2年)	鍋島 悠希 (妻木小2年)
伏屋 ちはや (駄知小3年)	三宅 里奈 (肥田小3年)	熊谷 文葉 (泉西小3年)
大橋 晴人 (妻木小4年)	井戸 菜津歩 (駄知小4年)	小山 悠琉希 (土岐津小5年)
伊納 多恵 (肥田小5年)	井上 耕助 (泉小5年)	後藤 紘誠 (駄知小6年)
三宅 伶奈 (肥田小6年)	能見 友理 (土岐津中1年)	澤田 剛 (泉中6年)
依田 悠花 (西陵中2年)		

【土岐市社会科課題追究学習作品展】

〔最優秀賞〕高橋 咲 (泉西小5年) 〔優秀賞〕安藤 憬悟 (泉小4年) 小山 凜咲希 (土岐津中1年)

【土岐市読書感想文コンクール 金賞受賞者】

あだち りほ (肥田小1年)	むとう がく (下石小2年)	わたなべ めいさ (妻木小2年)
野村 怜永 (土岐津小3年)	笹岡 咲楽 (泉小3年)	楓 葵結 (肥田小4年)
稲山 芽依 (下石小5年)	野村 昂生 (土岐津小6年)	戸田 綾音 (妻木小6年)
水野 凌誠 (西陵中1年)	宮地 利奈 (土岐津中2年)	中村 耕太郎 (泉中3年)

【土岐市発明くふう展】

<くふうの部>

〔土岐市長賞〕井上 晴日 (土岐津中3年)	〔土岐市議会議長賞〕松本 大河 (妻木小5年)
〔発明協会土岐支会長賞〕原 千莉 (駄知小5年)	〔土岐市地域振興部長賞〕小栗 創五 (土岐津小1年)
〔土岐市教育長賞〕伏屋 樹 (駄知小1年)	
〔奨励賞〕佐長谷 光紀 (駄知小5年)	宮村 彪馬 (泉西小4年)
後藤 明日奈 (土岐津小2年)	大槻 夢乃 (泉小4年)

<絵画の部>

〔土岐市長賞〕井戸 俊太郎 (駄知小1年)	〔土岐市議会議長賞〕山田 紅桜 (濃南中3年)
〔発明協会土岐支会長賞〕小栗 海莉 (肥田小3年)	〔土岐市地域振興部長賞〕福岡 彩葉 (駄知小4年)
〔土岐市教育長賞〕福岡 剛毅 (駄知小6年)	
〔奨励賞〕塚本 壮 (駄知小1年)	林 瞬夢 (泉西小2年)
加藤 千愛 (肥田中1年)	佐長谷 光紀 (駄知小5年)